

はんにやしんぎょう
『般若心経』について（四）

野口圭也（種智院大学客員教授）

Ⅲ. 『般若心経』の内容について（2）

3. 「五蘊皆空」について

玄奘訳では「五蘊皆空」、鳩摩羅什訳では「五陰空」ですが、サンスクリット文では少し違いがあります。大本系は「自性（③⑤⑧）」「性（④）」「体性（⑥）」の語を入れます。これはサンスクリット原典によく対応します。

pañca skandhās, tāmś ca svabhāvaśūnyān paśyati sma //

「5つの人間存在の構成要素（五蘊）があり、そしてそれらは本^{スヴァパーヴァ}体^{ヴァ}を欠いている、と見抜いたのであった。」

観自在菩薩が、「般若波羅蜜多」の行を深く実践している時に、このようなことを見極めたのですが、まず人間の物質的身体と心は、物質と精神作用の5つの要素（五蘊）から成り立っていて、それらすべてが、「本体を欠いている」ものである、と説いています。

五蘊とは、色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊の5つのことです。鳩摩羅什訳のように「蘊」の代わりに「陰」という字を使うこともあります。仏教においては、人間という存在は、基本的にはこれら物質的要素と精神的要素の集合体である、と考えました。物質にもいろいろありますが、それをすべてまとめて「ルーパ(rūpa)」としました。これが色蘊です。一方、精神的要素は細かく「受想行識」の4つに分類しました。それぞれの意味は、後で「受想行識、亦復如是」のところで説明します。重要なことは、人間はこの五蘊のみから成っていて、これ以外には、例えばインド伝統思想で認める「恒常不変のアートマン」のようなものも、存在していない、ということなのです。「五蘊仮和合」と言われるように、人間はこの5つの要素のみが仮に集合したものです。その他の構成要素はありません。従ってこれら5つが「空」であるなら、人間存在自体もまた「空」であることになります。

「空」の原語であるサンスクリット語のśūnyaは、立川武蔵先生の指摘するように、形容詞として複合語の後^{シュニヤ}分に置かれて「～を欠いている、～を持っていない」ことを意味します。ここでは、五蘊が「本体」を持っていない、五蘊には「本体」が欠けている、ということです。

「本体^{スヴァパーヴァ}(svabhāva)」とは、svaが「自分、自ら」、bhāvaが「存在」「性質」の意味なので、「自性」とか「本性」とか訳されることが多いです。しかしここでは「あるものをあるものとして存在せしめている、そのすべての存在の本質」「その存在を規定する実体的な本質」と解釈してみました。

Aが決して他のBやCではなく、Aとしてずっと存在し続けるためには、AをAたらしめる、Aとしての本体がなければなりません。しかし五蘊は、そのような本体を欠いている、と言うのです。そのような場合、色蘊なら色蘊が、色蘊という中身のぎっちりつまったものとして存在しているのではないのだから、恒常的に色蘊として存続することはあり得ません。すなわち、「諸行無常」となります。

その一方、逆にこのことによって、例えば私たち凡夫にも、「凡夫」としての存在を成り立たせている永久不変の「凡夫」の本体は無いのですから、凡夫以外の者、つまりブツダになる可能性が拓かれることにもなります。

次のような例えで考えてみましょう。「空車」の反対が「実車」であるのと同じように、「空」の反対、中身のギュウギュウに詰まったものは「実体」です。実車が客の目的地にしか行かないのに対し、空車は運転手の意のままに、どこにでも行くことができます。これが「心無罣礙」（心が何者にも妨げられない）の状態であろうと思います。

あるいは、中身の詰まった缶詰は、その缶詰以外のものにはなりません。たとえ缶に貼ってあるラベルがはがれて、中味が分からなくなっても、ミカンならミカン、パイナップルならパイナップルの缶詰であることは変わりません。これが「実体がある」状態です。一方、中に何も入っていない空の缶詰は、何の缶詰になることもできるのです。ミカンのラベルを貼ればミカンの缶詰、牛肉の大和煮のラベルを貼れば牛肉の大和煮の缶詰、と見なされます。もちろん、缶を開ければ中は空っぽです。しかし私たちは日常の経験の世界の中では、缶詰の中が空っぽなことを知らず、外のラベルを見てミカンの缶詰とかパイナップルの缶詰とかの判断をしています。それは心が誤った考え（「虚妄分別」と言います）に覆われているから、本当は空の缶詰を中味の詰まった、つまり実体のあるものと誤って理解しているのです。つまり「顛倒夢想」（ひっくり返った誤った夢想）をしているわけです。

そして本当は空の缶詰なのに、ありもしない中味が減っていくと思って悩んだり、増えていくような気がして喜んだり、自分の缶詰よりも他人の缶詰が良く見えてそっちの方が欲しくなったりします。本当は減りもしなければ増えもしない、自分も他人も同じ空っぽの缶詰に対して執着の心が生じているわけです。これが私たちの苦の原因なのです。しかし般若波羅蜜多を行じて、「五蘊皆空」と照見した時には、ラベルは単なるラベルに過ぎず、空の缶詰を空の缶詰としてありのままに正しく認識します。すると空の缶詰に対する執着を離れて、一切の苦厄から解放されるのです。ただし、サンスクリット原典やチベット語訳の中には「度一切苦厄」の文は存在しません。鳩摩羅什訳には存在します。恐らく翻訳の時に、般若波羅蜜多の行を実践することによって到達できる境地として、この句を加えたのでしょう。

